

衆生をしつらいたまう。しつらうというは、衆生のところを、そのままおきて、よきところを御くわえそうらいて、よくめされなし候う。衆生のところを、みなとりかえて、仏智ばかりにて、別に御したて候うことにては、なくそうろう。『蓮如上人御一代聞書』 六十四)

## 『念仏の相続』

根室別院輪番

小町 保雅

text by Yasumasa Komachi

十一重さんとの出遇いは、38年ほど前になるだろうか。初老を過ぎた位の、物静かで人を柔らかく包むような笑顔の女性だった。

平成16年に行年90歳で亡くなられたのだが、十一重さんの求道の話は初めて聞いたのは今から15年程前になる。

小学校高学年を頭に4人の子供に恵まれていた。或るとき大きな悩みを抱え、幾つもの新興宗教に救いを求めて、夜昼構わずその宗教でいうところの修行に励むのだが一向に活路は見出せなかった。その後、数ヶ寺のお寺を尋ね歩き、実家も嫁ぎ先も真宗ではなかった十一重さんが選んだのは当派の寺院である。以来、聞法を重ねていくのだが、その喜びは子供たちに聞いてきた話を伝えるほどだったそうだ。篤信な聞法は子供たちの成長と共に、躰にも教えの言葉が出たり、子供が独立してからは、家族が一堂に集まる機会があるときなど、蓮如上人が言われるところの「談合」が時を忘れてなされたり、昭和52年ころには、十一重さんを中心に親子三代での奉仕団上山が母を思う子供たちによって実現されたそうだ。また、既婚の孫二人とも仏前結婚式を執り行うなど、十一重さんが悩み苦しみの中から選択された念仏の教えは、願いと共に受け継がれていると言っても過言ではないだろう。

苦しみから本当に解放された方だからこそ念仏が受け継がれていくのだろう。生前、十一重さんが長男に言われていた言葉に「お念仏は自分の耳に聞こえる程度でいいから、声に出さなくてはいけないんだ」ということがあるそうだ。十一重さん自身、何かの出来事や法話の中の言葉に頷けたときに、いつも「南無阿弥陀仏」と思わず声に出していたという。私どもが本当に苦しみから解放されるのは念仏しかないのだという姿ではないかと思う。

仲野良俊先生が著書の中で、「われわれはいつでもお念仏をいただくことを通して、自分をおまえと言える場所へ移すのです。これは仏さまの場所です。そこへ移らなければいけません。わしがと

というようなところへ立っておっただめです。おまえというやつはなんというなさけないやつだと言える場所へ身に移さなければ、助かるということはない。…愚痴が愚痴だとわかる。そうなったら愚痴は智慧に転ずる。われわれは自己の愚かしさを知らないのです。そのために智慧が生まれてこない。そんなわけで、食欲の転じたのが清浄光、瞋恚の転じたのが歓喜光、そして愚痴の転じたのが智慧光。この転ずる働きがお念仏の働きなのです。」「…私は思うのですけれども、求道、聞法ということは、人間の心がけやそんなものでは続かないのです。教えを聞けば、聞いた教えの力が人間を動かしてくる。そういう力を聞光力という。」と示して下さっている。まさに、如来よりしつらわれている我が身であるのだ。

このたび、この寄稿の縁により、十一重さんと家族の姿から、おまえは我が家族に念仏を相続できるのか、その道場をどの様に預かって、どの様に次の世代へと渡していくのかという厳しい問いが投げかけられている。

念仏の道場、寺院がただの不動産として相続されたり、別院の勤務が月忌、法事、葬儀だけで終始するのであれば、僧侶という立場は一体何なのだろう。日頃の我が身を省みて深く恥じ入るばかりである。